

「わ」の破壊

「あー、すみません」

ドアを勢いよくあける茶子。

「いらしゃい、どうなさいました？」

マスターは言う。

「今、外の世界が急に白黒になってしまったので、怖くなって、それで・・・それで・・・」

茶子は立ち飲み屋のカウンターに身体をうずめる。

「ほー、それは大変ですね。でもよくあることですよこの辺りでは」

マスターはうすら笑いでグラスを拭く。

茶子はうずめる身体を少しだけ起こすと、カウンターの色彩を確認する。

それを見てマスターは言う。

「いいカウンターでしょう。海水浴していたら流れて来たんですよ。その材木」

茶子はカウンターを軽くなでると目線を上に向け心を落ち着かせる。

「何に致しましょう」

マスターは言う。

「えっ？」

と茶子。

「お飲物。何に致しましょう」

「あー」

茶子はマスターの頭の上に書かれているメニューを見る。

メニューよりもマスターのかぶる緑色のニット帽が妙にチラつく。先程の白黒の世界が嘘のようである。

「あー、そちらがメニューですか？」

マスターの後ろの壁にはメニューらしからぬ、墨で書かれた「わ」という文字が三つ並んでいた。

「そうです。こちら赤の「わ」、白の「わ」、温かいほつとの「わ」です」

マスターは、半紙に書かれた「わ」の文字を右の方から指差した。

「あつ、そうですか」

茶子は首をかしげながら言う。

「ほつとの「わ」でお願いします」

「かしこまりました。ほつとは、赤のみになっていますがよろしいですか？」

「あつ、はい」

茶子はそう言うのと、鞆を足元に置いた。

「あー、お鞆そちらに掛ける場所ありますのでよければ使ってください」

マスターはそう言うのと、ほつと「わ」の仕込みを始めた。

私は、外の世界が白黒だと言う事をすっかり忘れてしまった。なぜならこのお店は、赤とか緑とかたたくさんの色があるので。私は、ほつと「わ」が来る前にこのお店にたどり着いた経緯を冷静に考えてみた。それは今日と言う訳ではなく幼少期までさかのぼった。「カチッ」

マスターがコンロに火を付ける音がきこえる。

これは五歳の私である。初めての習い事をした。習字。その先生はとても優しくて大好きだった。ある時その先生は病気で亡くなってしまった。代わりに新しい先生がやってきた。

「キミはなんでその線を伸ばすんだ、書き順も違うし」

私は、「わ」という字が好きで、好きな文字を書けと言われたらまず「わ」という字を選んだ。新しい先生がそんな小言を言うのは、私が「わ」という字の真ん中の線を永遠に伸ばす癖があったからだ。書き順が違うというのは、「わ」の真ん中の棒線を最後に書くという事。先生がそう言うのも言うまでもない。もちろん五歳という事もあり怒られはしなかったが、新しい先生は、「わ」の真ん中の線にオレンジ色の墨で×を書いた。×と言う事はその線は完全にありえないという事だと私は判断した。それは毎回だった。死んだ先生は書かなかったのに。

「おまちどうさまです」

マスターはそう言うとかウンターに徳利を置く。

「赤のほつと」わ」です、お熱いので気をつけて下さい」

私は、注文を間違えたのかなと思ったがメニューは三つしかないの間違える訳がないとすぐに思った。そのとおり徳利には並々注がれた赤い液体が波紋をたて身をひそめている。私が勝手にグラスで来ると思っただけでマスターに見ればなんの変変わった様子ではなかった。

「こちらに注いでどうぞ」

マスターは徳利の横にぐい呑みを置く。

私は徳利の先端を持つ。

「熱っ」

とつさに指をなめる。

「大丈夫ですか？ですからお気をつけてねと言ったのに。先端を持つより真ん中を持つの方が熱くないですよ」

先に言えよ、と思った私だがマスターが優しく注いでくれたのですぐに許した。

私は赤のほつと「わ」を飲む前にもう一度「こまでの経緯を考えたと考えたと言っても秒数に表すと五秒くらい的事で真剣に考えると言う事ではなく、懐かしい音楽を聴いて青春を思い出すような。要は赤のほつと「わ」を見ながらどこか青春を思い出したのである。

五歳の私は一年たらずで習字をやめる。「わ」の文字に×印を書かれた半紙が百枚たまる。母がその百枚を押し入れの奥にしまっているところを見た事があるが、見て見ぬ振りをした。母は特に悪気があった訳ではなく、私は、そんな母の気持ちは何となく分かっていたので何も見えない態度をした。

小学生に入学。私は「わ」の真ん中の線を伸ばし続けた。あらゆる場所の「わ」を伸ば

し続けた。もちろん五歳の時は何も言われなかったが歳を重ねるごとに怒られもした。いじめにもあった。

「きみねー、そんな「わ」を書いては会社ではやっていけないよ」

大人になり会社の上司によく言われた言葉だ。私にしてみればそんな事分かってんだよ、と言いつ返してやりたいのだがそんな勇氣もなく説得力もなく、とにかく「わ」の線を伸ばした。ちなみにその線について理解者もいた。父だ。彼はある時こう言ったのである。

「いいじゃないかその「わ」、家に飾ろう。でもその×はなんだい。模様か？」

そう言いながら半紙を部屋中に貼っていた所、母に見つかり怒鳴られた。それも半紙を押し入れにしまった理由の一つである。

「茶子、線を伸ばすだけではダメだ。いろいろと曲がったり折れたりしてもいいんだぞ。」

私は父の言葉を守れば守るほど、世間から冷たい視線を感じた。そのせいもあり二十五歳辺りから、「わ」の線を伸ばすのをやめた。そのかわりと言ってはなんだが、私は新しい線を見つけた。これだ、これを進んで行けば面白い場所に行けるかもしれない。それはアスファルトの白線だった。この白線は多分「わ」の真ん中の線の続きであろうと思つた。私は日々白線を歩いた。「わ」の上を歩いた。それが青春です。

そう、こうしてたどり着いたのがこの店である。夢中で白線を歩き、振り向きざまに見た周りの風景が白黒だったという事です。それで怖くなりとっさにこのお店に入ったという事です。

私はそう思い出すと赤のほつと「わ」を一口飲む。

「ガチャン」

茶子の真後ろで勢いよくドアが開く。

「キヤー」

茶子はびっくりして赤のほつと「わ」をこぼす。

どうやらトイレに人がいたらしく不機嫌そうな男が出て来た。

「てめーなにしてくれんだ」

シブい男性の真っ白なシャツに、赤のほつと「わ」がかかる。

「大丈夫ですか？」

マスターは聞く。

「大丈夫な訳ねーだろ、どーすんだよこのシミ、えつ、ネーちゃん」

男性はトイレのドアを勢いよく閉めると茶子の横に立った。

「なー、黙ってネーでなんとか答えろよ」

茶子は、空になったぐい呑みに赤のほつと「わ」を並々と注ぐ。そして何を思ったのか男性のシャツに勢いよくまき散らす。

「あーいい半紙があった、久しぶりに書こうかしら」

そう言ううと茶子は徳利を持つ。そのまま男性にむかつてほつと「わ」をぶちまけた。

「熱っ。なにするんだテメー」

男性の真白シャツには半紙に書かれた水墨画のような文字がにじむ。

それは真つ赤である。

茶子は一步前が出る。

「うるせーんだよ。今この街は白黒なんだよ。そんな国になりかけてるんだよ。お前に何がわかるんだよ」

茶子は罵声をあびせながらドアを開ける。

「あー、気でも狂ったか？」

男性は言う。

すると茶子は笑いながら赤いほつと「わ」の残りを男性にかける。

「デマー」

男性の白シャツは芸術的作品に仕上がる。

「あー、いい「わ」が書けた」

茶子はそう言うのと徳利を勢いよく外に投げ捨てた。

徳利は粉々に大破すると赤いほつと「わ」は白線の上をなだめた。

「すみません、もう一杯頂けます、赤の「わ」。冷たくていいので」

「かしこまりました」

マスターはそう言うのと、すぐに赤の「わ」出した。

「いただきます」

茶子はそう言うのと徳利を持つ。

「ごちそうさまでした」

カウンターに二千円を置き外に出る。

「お、おい、待てよ」

茶子は男性を無視すると白線に赤の「わ」をたらしながら来た道を歩いた。

白線は赤く染まる。それはとても美しく情熱的だった。茶子には今の街が何色に見えたのか分からないが白線が赤く染まっているのは確かだった。

「おしぼり使います？」

マスターは聞く。

男性は胸元に手をやるとゆっくりと外に出る。

「待てよ」

小声でそう言うのと、茶子の後ろ姿に銃を突きつけた。

銃声に驚いたカラスと白いハトは楽しそうにこの街を徘徊した。